70 「癘」についての一考察

吉岡広記
日本鍼灸研究会

「癘」の古義は、疫病（『左伝』昭公元年「癘疫」）であったが、『説文』では「悪疾」と言い、段玉裁も「今義別製「癩」字、訓為悪瘡、訓「癘」為癘疫」と指摘するように、漢代には二義となり、三国時代には「癩」が造字された。それは、一～二世紀に河南、安徽、湖北、浙江周辺での集中的な「大疫」の流行（加納喜光『中国医学の誕生』）や嶺南の温暖な気候（『肘後方』巻二・第十五「西南温風」、『諸病源候論』（以下『病源』と略す）巻十・瘴気「節気多温」）による「疫癘皰瘡」「瘴気」の蔓延が契機となり、主に医学の場面で生じた。

医書では張家山漢墓より出土した『脈書』（「四節疕如牛目、麋（眉）突（脱）、為厲」）が初見である。次いで『素問』『霊枢』に見え、そこでは「癘」一字の場合（脈要精微論、風論）と、「風」と結びつけて「癘風」（風論「鼻柱壊而色敗、皮膚瘍潰」、四時気）または「大風」（長刺節論「骨節重、鬚眉堕」）と称される場合とがある。これらは、後に「癩」として別称される以前の、字義の細分化がなされた段階を示している（『史記』巻八十六・刺客列伝「漆身為厲」もその一つ）。また、『肘後方』巻二、巻五および『外台秘要方』巻三十と『医心方』巻三所引の六朝期の佚書、『病源』巻二、巻五、『千金方』巻二十三などの記述から、原義「癘疫」と漢代に生じた新義「癘風」とを区別するために、三国時代より新義を付与された造字「癩」が用いられるようになったことがわかる（「癘疫」への言及は『肘後方』『病源』のみ）。その変化は、『玉篇』（「癘、疫気也」）を境に小学書にも波及するに至った。

一、「疫癘」「疫疾」「癘鬼」としての「癘」

「癘」の声符「萬」には、清の呉善述『六書約言』象動物に「萬、本蜂也。其数衆多」とあるように、「蟲」（『説文』「萬、蟲也」）という字義のほかに「多」という意味がある。そこから引伸して「多くの人（萬民）が病む」、すなわち「疫」（『説文』「民皆疾也」）と同義と解され、連語として用いることでそうした意義が強

くなっていった。『周礼』天官・冢宰下・疾医の「四時皆有癘疾」に付された鄭玄注「気不和之疾」をもとに、「節気不和」（『病源』巻十）あるいは「時気病衆」（『慧琳音義』巻四十九）により流行（『大戴礼記』盛徳「病流行」、『病源』巻十「民多疾疫」）する病と説かれる所以である。「鬼」が病因の一つとされるのもまた「疫」（『釈名』釈疾病「疫、役也、言有鬼行役也」）との関わりにほかならない。

二、「悪風」「毒蟲」「大風（癘風）」により生じる「癩」（「悪疾大風」「悪瘡」）

『肘後方』以下、六朝期の諸書に見える「癩」は、『素問』『霊枢』以来の「癘風」を継承し、「癘」と区別される。「風」のほかに「癘（瘮）」の声符「蛍」の字義（『説文』「蛍、毒蟲也」）を援用して、「毒蟲」が病因として新たに加わることになる（『病源』巻二・諸癩候）。「悪瘡」は「皮膚瘍潰」のことで、『山海経』西山経の郭璞注にもその二字が見え、この頃に「悪疾」との語呂合わせで作られたようである。『肘後方』以降、医書中に散見されるようになる。

三、「癩」の造字起源の問題

医書以外での「癩」の初見は、『淮南子』精神訓である。その後は後魏の『字統』や梁の『文字集略』（いずれも『慧琳音義』所引）、隋末の韻書『切韻』（敦煌写本『刊謬補缺切韻』より確認）などを待たねばならない。ほか『毛詩正義』大雅・文王之什・思斉「烈仮不瑕」の孔穎達が疏に引く『説文』に、「癘、疫疾也、或作「癩」」とあり、それについて清の鄭珍（『説文逸字』）や李楨（『説文逸字辨證』「「癩」為許氏重文而始連及之也。若唐本『説文』「癘」下原有重文「癩」、慧琳豈独不見而斥為俗乎。『玉篇』疒部、乃賓而不收乎」）は、唐代までの『説文』では二字が重文であったと推論している。これに従えば、漢代まで引き上げられなくもないが、用例の少なさから、『淮南子』では元来「癘（厲）」であった可能性があり、『説文』の重文説も根拠が薄く、「癩」の造字起源は三国時代頃とするのが妥当であろう。